

これからの

2010 ● Spring

春

幼児教育を考える

特集

保護者の成長を促す 園の支援とは

インタビュー

子安増生

京都大学大学院
教育学研究科教授

事例紹介

山口大学教育学部附属幼稚園 (山口県・国立)

スカイハイツ幼稚園 (神奈川県・私立)

津田このみ保育園 (兵庫県・私立)

大谷口保育園 (東京都・公立)

調査データ

データから見る 幼児教育 父親の子どもとのかかわりと子育て観

回覧して
お読みください

Benesse® 次世代育成研究所

1 特集

保護者の成長を促す園の支援とは

1 インタビュー

今求められている保護者支援のあり方

京都大学大学院教育学研究科教授 **子安増生**



4 事例紹介1

子どもと保護者と保育者が共に育つ「保護者サポートシステム」を構築
山口大学教育学部附属幼稚園

10 事例紹介2

子育て講座を受講した母親が「お母さん保育士」として活躍
スカイハイツ幼稚園

14 事例紹介3

自由参加型のサークルで保護者同士のつながりを再生
津田このみ保育園

16 事例紹介4

子どもの様子の伝え方を工夫して、保護者と保育者が思いを共有
板橋区立大谷口保育園

20 調査データ

データから見る 幼児教育

父親の子どもとのかかわりと子育て観

家事や育児に今以上にかかわりたいか	20	子どもをどこまで進学させたいか	23
もっとかかわりたいと思っている家事や育児	20	子どもの将来像	23
父親が家事・育児をする頻度	21	父親として不安なこと	24
子育てで力を入れたいこと	22		

ベネッセ 次世代育成研究所 とは

少子高齢化、核家族化のさらなる進行、女性の社会進出、経済のグローバル化、ITによる情報化など、社会環境の変化が加速し、家族のあり方や親子関係を含めた子どもの育成環境に大きな変化が起こっています。

ベネッセ次世代育成研究所は、子育て世代の生活視点を大切にしながら、妊娠出産、子育て、保育・幼児教育、子育て世代のワークライフバランスを研究領域として、家族と子どもが「よく生きる」ための学術的な調査研究と体系的な理念の構築を行います。

また、その調査研究成果を子育て世代を支える産科・小児科などの医療機関、保育・幼児教育の専門家の方々に発信し、よりよい子育て環境を作る一助となることを目指します。

さらには、調査研究ネットワークを海外へも広げ、複眼的、学際的視点から日本の次世代育成を考えていきます。

特集

保護者の成長を促す 園の支援とは

インタビュー

今求められている保護者支援のあり方

地域や家庭における人間関係のつながりが弱くなり、子育てに悩む保護者が増える傾向にあります。

それと同時に、園に対する保護者の期待も高くなっているようです。

子どもとともに保護者自身も「保護者として」成長していくために、園ではどのような支援ができるのでしょうか。

発達心理学を専門とする子安増生先生にお話をうかがいました。



京都大学大学院教育学研究科教授

子安 増生

こやす・ますお

京都大学大学院教育学研究科教授。専門は発達心理学。2008年より日本発達心理学会理事長を務める。著書に、「幼児期の他者理解の発達」(京都大学学術出版会)、「心の理論」(岩波書店)、共著に「幼児が「心」に出会うとき-発達心理学から見た縦割り保育」(有斐閣)など。

自分の子ども時代を振り返り 子育てに客観性を 保つことが大切

もしかすると、現代は子育てが難しい時代かもしれない——私はそう考えることがあります。核家族化が進んで体験にもとづいた子育ての知識や経験が受け継ぎにくくなって

いる一方、テレビやインターネットにはさまざまな情報があふれている。保護者が子育てに迷いをもつのは当然と言えるかもしれません。その結果、幼稚園や保育所に多種多様なテーマについてアドバイスを求めるだけでなく、保育者に過剰な期待や要求を寄せるようになる保護者が増えているのだと考えられます。

保護者の抱く不安や心配を取り除くには、まず、子どもの発達についての確に理解してもらうことが大切です。そこで発達心理学の見地から、保護者に対してどのようなサポートや助言ができるかをお話ししましょう。

私が保護者に対して強調して伝えるのが、常に客観的な視点をもって



み出した概念で、親子の情緒的・心理的なつながりを指します。ボウルビイは第二次世界大戦で孤児になった子どもの心身の発達が遅れた要因は、医学的なケアよりも、ヒューマンケアにあると指摘して、愛着関係の大切さを訴えました。

愛着と子どもの発達の間を、このようなテストがあります。母親と子ども、そして見ず知らずの他人の3人がしばらく同じ部屋で過ごした後、母親だけ、または母親と他人と一緒に室外に出ます。すると、どちらの場合も、愛着関係が十分な親子の場合、子どもはあまり動揺しませんが、不十分な場合は母親から離れると、心理的に非常に不安定になります。この結果は、しっかりとした親子関係があれば、子どもの自立がスムーズになることを示唆しています。

乳児期は親子がずっと一緒に過ごすのも良いのですが、やがて発達に伴って離れる場面が生じてきます。タイミングとしては、幼稚園や保育所に入る、子ども部屋をつくる、あるいは小学校に入学するときなどが考えられるでしょう。

こうした節目では、心理的な愛着を保ちながらも、かたちの上では明確に接し方を変えてはなりません。それが「ぴったりくっつく」ことです。そのような体験の積み重ねにより、子どもの自立心が育っていくのです。

これは、親にとっては「子離れ」のきっかけとなるでしょう。いつま

でも親が子どもの身のまわりの世話をしていたら、子どもが何でもできるようにならないのは当然です。にもかかわらず、「うちの子は何もできない」と嘆く親をよく見かけます。こうした悪循環に陥らないためには、保護者が子どもの力のある程度信じ、子どもに任せる範囲を徐々に増やしていく必要があるでしょう。

繰り返しになりますが、子どもと「離れる」ときでも、常に心理的なつながりは実感させることが重要です。手のひらを返すように冷たい態度を取れば、愛着関係が崩れてしまいかねません。つまり、「ぴったりくっつく」と「ぴったり離れる」はセットになっているのです。

発達に応じて使い分けたい「号令・命令・訓令」

子どもの発達に伴い、語りかけ方も変えてください。その際、「号令・命令・訓令」の3つの考え方を意識すると、発達段階に応じた伝え方ができるでしょう。これは保護者だけでなく、保育者にもぜひ知っていただきたいことです。

号令は「○○をしなさい」と行動だけを伝え、命令は「○○だから、○○をしなさい」と理由も示します。一方、訓令は「○○をしなさい。方法は任せる」と、自由度をもたせた言い方です。

乳児に対して命令をしても理解してもらえませんが、号令のほうが

適切です。逆に5歳児に号令ばかりをしていたら、自分で考えて行動する力が育ちませんので、理由を伝える必要があるでしょう。また訓令はかなり高度ですので、一般的には小学生になってからと考えてよいでしょう。

もうひとつ、語りかけ方についてお話ししましょう。生活や保育の中で「駆け・引き」の言葉を意識することの大切さです。

「駆け」は、「もっとがんばって」「もう終わっちゃうの?」「まだできるでしょう」などと、子どもを励まして奮立たせる言葉。一方、「引き」は、「よくがんばったね」「今日はこれくらいにしよう」「また明日やろうか」など、子どもを認めて活動を終わらせる言葉です。明らかに疲れている子どもに対して、駆けの言葉をかけるのは酷なだけでなく、信頼関係を損ないかねません。きちんと引きの言葉をかければ、子どもは「自分を受け入れてくれた」と満足し、次もがんばろうという気持ちになるでしょう。場面に応じて、どちらが適切かを判断してください。

信頼関係を構築するカギは保護者との約束を守ること

最後に、保護者との関係づくりについて考えてみましょう。保護者の中には、幼稚園や保育所に頼りすぎて、「どんなことでも対応してくれるはず」と考えるかたもいるかもしれませんが、現実には保育者

のできることに限りがありますから、ときには断然なくてはならないこともあるでしょう。そのようなときに、保護者との関係をギクシャクさせないためには、日ごろの信頼関係が前提となります。

すべての人間関係の基本ですが、保護者から信頼されるには約束を守らなければなりません。保護者との約束とは、個々に口頭で交わしたものでだけでなく、教育方針など園全体として打ち出しているものも含まれます。

約束を守るには、「守れない約束はしない」ことも大事です。安請け合いをしたり、全てを園が背負い込もうとしたりせず、ふだんから自分たちのできることに自覚的になっていくとよいでしょう。信頼関係さえできれば、例えば、子どもの体調に関する質問に対し、「それは園ではなく、病院で聞いてください」と返答しても、おそらく冷たくあしらわれたという悪い感情は抱かれなくていいでしょう。保護者が保育者に信頼を寄せていることは、子どもにも必ず伝わり、子どもと保育者の関係にも良い影響を与えるはずですよ。

子育てには悩みが付きものですが、もちろんプラス面も多く、特に子どもを通して人生を生き直すことができるのが最大の喜びだと、私は考えています。そのような子育てのプラス面を伝えることも、保護者の不安や心配を減らすとともに、信頼関係や協力関係を築いていくためのカギとなるのではないのでしょうか。

子育てをしてほしいということですが、例え話ですが、おそろくちょうちょうは青虫を見て、かつての自分の姿とは思わないでしょう。同様に大人はかつて自分が子どもだったことを忘れがちです。子どもには子どもなりの苦しさや悲しさ、また楽しさや喜びがあり、それらに共感できないと親子の気持ちにギャップが生じます。保護者は「自分は親から何を言われてつらかったか、うれしかったか」などと、常に自身を振り返る必要があるでしょう。

客観的な視点をもてないと、保護者は子どもの成長を長い時間の中でとらえられず、ちょっとしたことに不安を抱くようになります。例えば、オムツ外れが多少遅くなくても大問題ではないことは、客観的に考えれば

分かるでしょう。しかし、わが子となると、そう考えられない親が少なくありません。そのような保護者には、今現在の出来事だけに集中せず、長い時間の中で子どもを見守ることの大切さを伝えるとよいでしょう。

愛着関係を保ちながら親子が離れていく体験が重要

次に、子どもの発達に応じて接し方を変えることの大切さをお話ししましょう。私はこれを「ぴったりくっついて、ぴったり離れること」と言い表しています。

「くっつく」は、「愛着」と言い換えられます。愛着とはイギリスの児童精神科医ジョン・ボウルビイが生

事例紹介 1

子どもと保護者と保育者が共に育つ「保護者サポートシステム」を構築

山口大学教育学部附属幼稚園（山口県・国立）

山口大学教育学部附属幼稚園では、20年前から保育参加を実施するなど、長期に渡る保護者支援に取り組んできました。その特徴は、子どもの成長と保護者の変容を見通した「保護者成長支援プログラム」をもっていることです。

「指導」ではなく、一緒に育つ関係へ

インタビュー

保護者支援の研究を進めた山口大学教育学部教授の友定啓子先生、さらに河野令二園長先生をはじめとした幼稚園の3人の先生がたに、研究と実践のポイントについてうかがいました。

子どもと保護者と保育者がともに高め合う関係へ

友定 山口大学教育学部附属幼稚園が保護者支援に関する研究に取り組んだのは2002年。多くの親が子育てに不安を抱える状況が社会問題となっていたことがきっかけでした。

難しいテーマであるのは承知していましたが、この園では研究を始めた時点で15年近くに渡って保育参加を続けているなど、保護者と正面から向き合おうとする姿勢がありました。保育参加をはじめ、以前から取り組んでいた「保護者支援メニュー」を一つひとつ見直し、ねらいや手法

を見つめ直すというスタンスで研究を進めました。

大森 私たちが研究に前向きに取り組めたのは、もともと、「保護者と一緒に子育てに取り組んでいく」という意識があったからだと思います。そのベースには、子どもの成長は保護者抜きには考えられないという思いがあります。

友定 最初に先生がたに研究テーマを提案した際、「保護者を指導するのではなく、一緒に育っていくという視点で研究をしたい」という意見が返ってきました。それで、保育者と保護者が、子どもを中心に置いて支え合う関係でいたいという思いを込めて、「共に育つ—子どもと親と保育者と」という研究テーマにしました。

中村 毎日の保育を振り返っても、「いつも大変ですね」「がんばってください」といった保護者の言葉によって前向きな気持ちになることは

多いです。研究を通して、ともに高め合っていく関係の良さをさらに実感しています。

保育参加の回数を重ねるごとに子どもの気持ちを理解する保護者に

友定 研究で最初に取り組んだのが、園での3年間を通じた保護者の変容をとらえることです。保護者とのやり取り、保護者へのアンケート調査、また保育参加の終了後に行われるミーティングの記録などを検討し、保護者の抱える悩みや課題には、子どもの年齢や時期に応じて一定の傾向があることがわかりました。それをもとに各時期に必要な支援内容

や保育者の配慮をまとめたものが、保護者成長支援プログラムです。（4ページ・図1）

大森 それまで保護者の意識変化は、保育者それぞれが経験的にとらえていただけでした。それを見えるかたちに表したことで、3年間を通してどのように保護者と向き合っていくといいか、見通しをもてるようになりました。

中村 そうですね。例えば、入園してすぐの時期は保育者に対して一方的に要望を話される保護者が少なくありませんが、しだいに視野が広がって変化してきます。そうした道筋が明らかになり、「この時期は話を聞いてあげることが大事だな」などと、自信をもって対応できるよう

になったと思います。

友定 保育者の中で保護者へのかかわりが共有できたことも、大きなプラスでしょう。若い保育者も、見通



山口大学教育学部教授
友定啓子先生

2001年から2004年まで山口大学教育学部附属幼稚園の園長を務める。



山口大学教育学部教授
園長
河野令二先生



研究主任
大森洋子先生



教務主任
中村万紀子先生

図2 保護者の成長過程（保護者サポートシステムより）

「保育理解」「幼児理解」「保護者自身のあり方」という3つの視点から保護者の成長をとらえた図。子どもの年齢が上がるにつれて、右上の方向に変化していく。

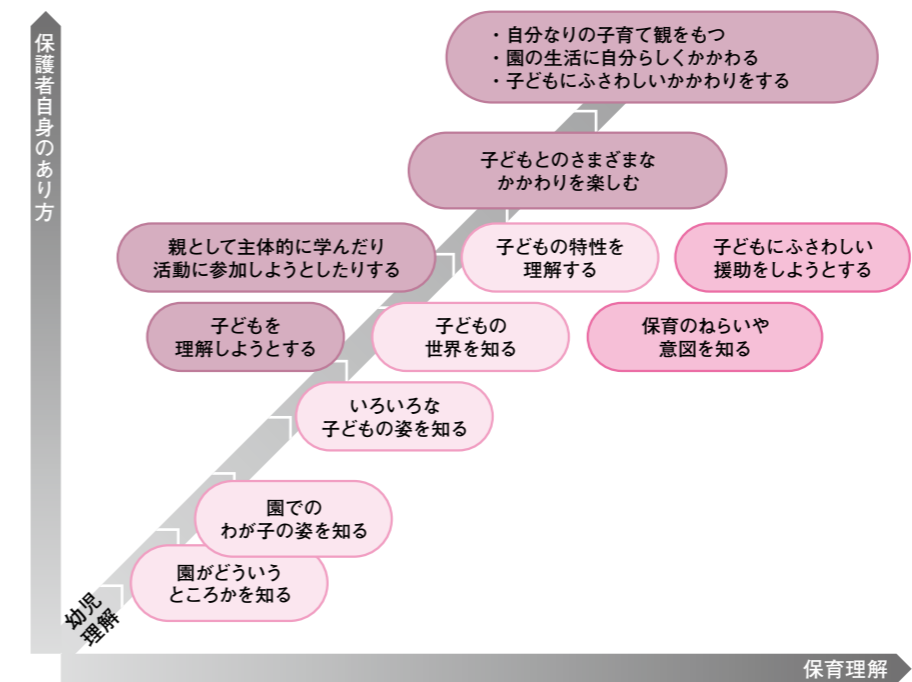


図1 保護者成長支援プログラム

3歳児4月～5月上旬の一部。3～5歳の教育課程の各時期に合わせて、保護者の姿や支援内容が詳しく書かれ、保育者間で共有されている。

保護者の姿	<ul style="list-style-type: none"> 園生活の具体的なことについてわからず、不安が多い。 自分の子どもが園生活についていけるか不安になる。 親同士の関係づくりで不安と緊張がある。
保育者の配慮	<ul style="list-style-type: none"> 保護者の緊張を和らげるように接する。 保護者との信頼関係を築く（帰りのあいさつのときに、その日あったことや保育者が感じたことを一人ひとりに話す）。 子どもが何かして遊ぶというよりも、初めての集団生活で安定して過ごせることや慣れていくことがまず大切であることを、保護者が理解できるように話す。
保護者支援内容	<ul style="list-style-type: none"> 毎朝、子どもとともに保育室に入っていくことで、生活の雰囲気を感じ取ったり、子どもの幼稚園での生活の仕方を知ったりする。 子どもと保育者に任せようという気持ちで、送り出そうとつとめる（子離れする）。
具体的な活動内容	<ul style="list-style-type: none"> 【通信・講話】園だより、保健だより、園長講話 【相談・懇談・茶話会・ミーティング】学級担任の話、森の木陰のティータイム 【保育活動への参加】保育参加オリエンテーション 【保育環境づくり】花の水やり

「保護者サポートシステム」（フレーベル館 2004年）より



しをもって保護者に接することができるようになりました。その中で保護者の変化を促す重要なものが、保育参加でしょう。保育参加の回数を重ねるにつれて、保護者は目に見えて変容していきます。(5ページ・図2)

河野 「子育ては大変だ」と思われている保護者が大半でしょう。かといってひとりで思い悩まず、そもそも子育ては大変なものだと開き直ってしまえば、かなり気が楽になります。そのように発想を変えるうえで、自分の子どもだけでなく、他の子どもを見るのがとても大切です。子どもたちを比較するのではなく、一人ひとりのいろいろな見方や感じ方を獲得して、それをほかの保護者と共有できたときに、保護者は大きく変わるのではないのでしょうか。

保護者としての成長は子どもと楽しく遊んだ結果

中村 保育参加は、園の保育のねら

いを伝えるのにも有効です。特に、私たちの園の特色である子どもが自由に遊びを選択する保育は、ねらいを伝えるのが難しく、ときには遊んでいるだけと見られてしまいます。実際に保育に参加してもらえば、理解がより深まるだろうという考えが、そもそも保育参加を導入した原点です。

大森 子どもに対する考え方を広げたり深めたりするのも、目的のひとつです。保護者は、子育てを「頭」で考える傾向があります。例えば、子どもが親の言うことを聞かないときに、「なぜわからないのか」と、大人の頭で考えて、腹を立ててしまったりします。これは、子どもには子どもなりの考え方や感じ方があることを理解していないのが原因でしょう。その点、保育参加は子どもの世界を体感して理解するうえで有効と考えています。

中村 子どもの世界を理解していないと、気持ちの面でギャップが生じてしまいます。例えば、幼稚園で作った色水を持ち帰ってきたら、思

わず「捨てなさい」と言ってしまう保護者もいるかもしれません。でも、実際に園で一生懸命に作っている姿を見て、「こんな思いで作っているんだな」と気づけば、その後の受けとめ方も変わってくるのではないのでしょうか。

大森 3歳児の保護者の中には、「自分の子どもがこうだから、ほかの子ども同じだろう」と考えるかたも少なくありません。自分の子どもしか育てたことがないので、これは当たり前だと思います。保育参加が子どもの見方が広がるきっかけになれば良いと思っています。

中村 保育参加は、保護者の成長を促すと同時に、保護者が保育を楽しめる時間でなければならないとも考えています。子どもと一緒に楽しく遊んだ結果、保護者として成長するというのが理想ですね。

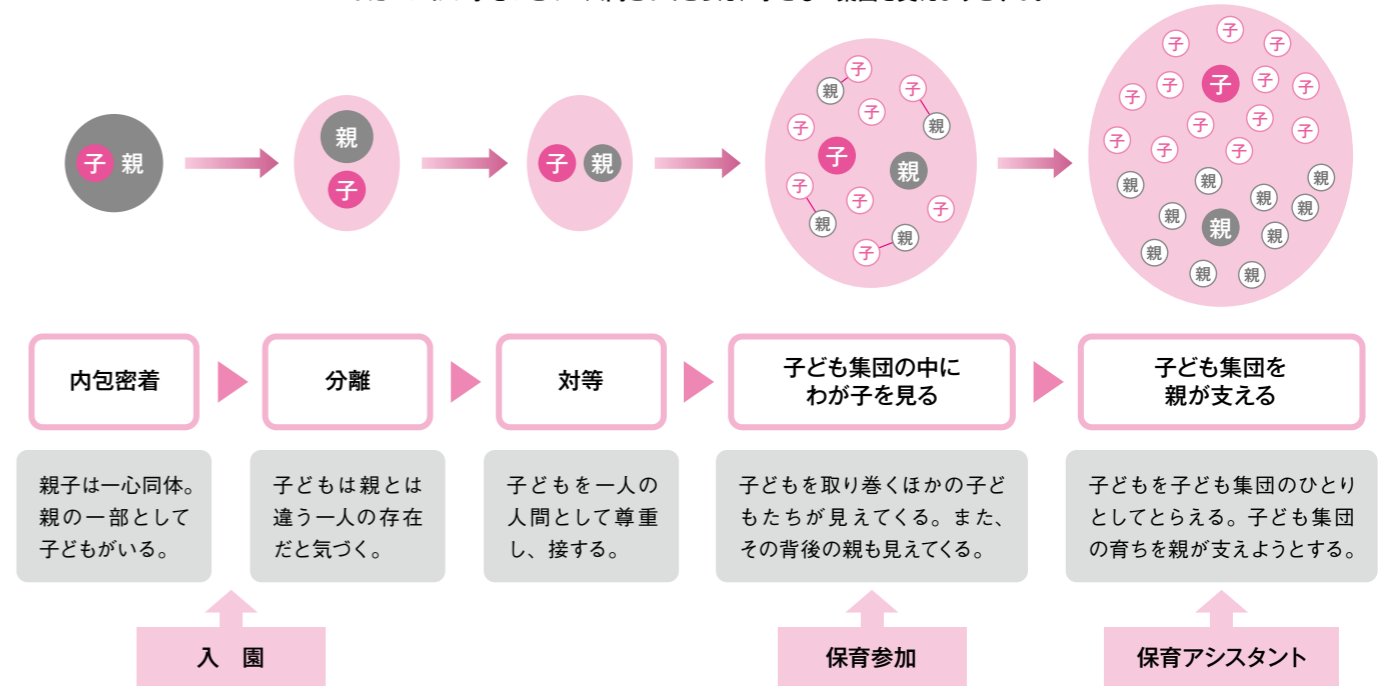
友定 保育参加が本当に実のあるものになるかどうかということでは、子どもと一緒に遊んだあとのミーティングも非常に大切です。

中村 確かにミーティングは、子育て

図3

親子関係の変容過程(保護者サポートシステムより)

保護者の視野が広がるにつれて、親子関係が変化する様子を図式化。入園時、親子関係は一心同体だが、しだいにわが子をひとりの人間としてとらえ、子どもの集団を支えようとする。



てについてじっくりと話し合う大切な機会となっています。ふだんはなかなか聞けない保護者の本音が聞けることも少なくありません。保育者と保護者の1対1ではなく、少数のグループというのも良いのでしょうか。実際に保育を見てもらったあとですから、こちらとしても保育のねらいを説明しやすいという良さもあります。

園と保護者の関係が強まって地域の子育て力の向上へ

友定 保育参加の良い影響のひとつには、幼稚園と保護者の協力関係が強まり、PTA活動が活性化していることも挙げられます。

河野 「ピーマンJr.の会」と称する父親だけの集まりも活発です。これも家庭と幼稚園の距離の近さが背景にあるのかもしれませんが。

中村 卒園後も、工作に使う空き箱を持ってきたり、行事などのボランティアを申し出てくださったり、園と保護者のつながりは強いと思います。これは保護者が園の方針を理解し、共感してくださっているからだと考えています。

友定 研究と実践を通して、一人ひとりの保育者が保護者との関係について、じっくりと考えるようになったのも大きな成果と言えます。大森先生と中村先生は、保育者として保護者支援を行うにはどのような気持ちが必要だと考えていますか。

大森 まずは保護者に興味をもち、好きになっていくことから始まるのではないのでしょうか。これは決して難しいことではないと思います。一人ひとりの子どもを理解するには、その背後にいる保護者を知ることが当然必要になるからです。その

ように、子どもを通して保護者とながっていくことを大切にしています。

中村 心を開いて保護者と話すことが必要だと思います。毎日送迎時に会っていると、「最近、元気がないな」などと感じることはありません。そういうとき、ちょっと声をかけてみるだけでも関係は変わっていくと思います。

友定 保護者と対等な関係を築いていくことが、子どもの成長と保育の充実につながると、双方が実感できることが大切です。ここで子どもたちとかわった保護者が、地域の子育て活動に積極的に参加しています。このようにして、地域の子育て力の向上にもつながっていくことは、とてもうれしいことです。

「保護者サポートシステム」における保育参加

実践

山口大学教育学部附属幼稚園の「保護者サポートシステム」は、実際にはどのように行われているのでしょうか。2009年10月に行われた3歳児の2回目の保育参加を見学させていただきました。

「見るだけ」ではなく「一緒に遊ぶ」

「保護者サポートシステム」の柱の1つとなっている取り組みが保育参加です。園が保育参観から保育参加に変更したのは、1986年にさかのぼります。その他にいろいろな保護者向けメニューがあり、これらを保護者の状態に合わせて関連づけて実施する体制にしたそうです（図4）。

3・4歳児の保育参加は、すべての保護者を対象に、学期に1回、年3回行います。5歳児の保護者にはその日の保育のねらいを説明し、役割をもった「保育アシスタント」として参加してもらいます。野外活動やクッキングなど、保護者が入ることによって保育が充実していくものを、年間指導計画の中から選んでいます。5歳児の保育参加は3学期に1回行います。

保育参加の実施期間は1週間ほどで、各日3～5名が参加。今回、見学させていただいた3歳・花組の保育参加には4名の保護者が参加し、

午前中いっぱい、保育室や園庭で子どもと一緒に遊びました。

この日も子どもたちは保育室や園庭で自由に遊んでいます。保護者のみなさんは慣れた様子で子どもたちの輪の中に入り、一人ひとりと言葉を交わしたり、遊びを支えたりして楽しんでいました。子どもたちも、友だちのお母さんと遊ぶのを喜んで

いるようです。1学期の保育参加に比べると、子どもと保護者の双方の様子が大きく変化し、教務主任・花組担任の中村万紀子先生は次のように話します。

「1学期は子どもたちがなかなか落ち着かず、少しぎくしゃくした様子も見られたのが、『たった半年で子どもの姿がすごく変わった』と、

図4 保護者サポートシステムの実践

5つの視点から現場での取り組みを充実させて、保護者の成長をサポートしている。

1 園の方針や考え、保育内容などの伝達

- ・通信（園だより、保健だより）
- ・講話（園長講話、副園長講話）

2 積極的に学べる場や機会の設定

- ・講演会（年2回程度）
- ・講座（子育て講座・年4～5回）

3 気軽に話せる関係作りと日常的懇談

- ・日常的相談・懇談
- ・学級懇談（年3回）
- ・個人懇談（2学期末）
- ・教育相談（6月下旬）

保護者サポートシステム

4 子育てを話し合う場や機会の設定

- ・茶話会（年4～5回）
- ・ミーティング（保育参加、および保育アシスタントの終了後）

5 保育参加や保育体験の場の設定

- ・保育参加（3・4歳の保護者は各学期1回。5歳児は3学期に1回）
- ・保育アシスタント（5歳の保護者。保護者1人につき3回程度）

保護者の声

守永果奈さん（3歳児）

○1回目の保育参加では娘がまだ園に慣れておらず、私にくっついて回っていました。それが今回はほかのお母さんや友達と楽しそうに遊ぶのを見て成長の早さに驚きました。遊びを通して相手の気持ちを感じ取ろうとする姿など、家では見せない一面が見られたのがうれしかったです。先生がたが子どもたちとじょうずにかわるのを見るのも、子育ての参考になります。



高杉佳子さん（3歳児）

○娘が保育参加をととても楽しみにしていました。幼稚園でお母さんと遊ぶという体験がうれしいようです。子育てについて悩むこともありますが、保育参加を通して子どもが楽しそうに過ごしているのを間近に見ると、安心して幼稚園に送り出すことができます。さらに、ほかのお母さんと知り合って子育てについて話をする貴重な機会にもなっています。



※（ ）内は子どもの年齢



保護者の成長支援で園に求められることは、成長の場と機会を提供すること。保育参加は、保護者がそれぞれのニーズとベースで成長することを支援している。

保護者は口をそろえて驚いていました。保護者にとっても初めてだった前は、どのように子どもたちと遊んでよいか分からずに困惑されたかが多かったんです。でも、2回目となるとずいぶん慣れて子どもの遊びの世界に自然に溶け込んでいたようです」

「自分の子ども」から「園の子どもたち」へ

保育参加の終了後は、保育室で参加者と担任の先生によるミーティングが行われます。話し合われるのは、その日の子どもの様子や感想、子育ての悩みなど。例えば、この日参加した保護者の1人は、1学期のころ、子どもが毎朝泣いて園に行きたがらず、とても悩んでいるとき、ほかの

保護者が話を聞いてくれ、「うちもそうだった。じきに慣れるわよ」と言ってくれたことが心強かったという話をされました。

「ときには、保育者が話すより、ほかの保護者による経験を交えたアドバイスの方が心に届くことがあります。保育参加とその後のミーティングは、保護者同士が情報を交換し、支え合う場としても機能しています」（中村先生）

入園当初は、保護者の多くが「自分の子ども」しか見えない状態ですが、保育参加の回数を重ねるにつれて、「クラスの子どもたち」「園の子どもたち」へと視野が広がっていくそうです。（7ページ・図3）

自分の子どもの仲間としてほかの子どもを受けとめることで、園に豊かな人間関係が広がっています。

山口大学教育学部附属幼稚園



○自然を生き、子どもの動線を考え、動きを豊かにする環境の構成が特色。園庭では年齢やクラスの異なる子どもたちが一緒になってのびのびと遊ぶ。「保護者サポートシステム」を通じた保護者支援に力を入れ、PTA活動も盛ん。

園長 河野 令二先生

所在地 〒753-0070
山口県山口市白石3丁目1-2

園児数 160名（3～5歳児）

事例紹介 2

子育て講座を受講した母親が「お母さん保育士」として活躍

スカイハイツ幼稚園（神奈川県・私立）

スカイハイツ幼稚園では、園長先生の子育て講座を受講した卒園児や在園児の母親を、「お母さん保育士」として認定しています。「お母さん保育士」は、未就園の子どもと母親が遊びに訪れる園内の「すくすく広場」で活躍。母親が園の活動に参加することで、幼稚園との絆がより深まりました。

保護者が園で活動する機会を多くつくる

はじめに

スカイハイツ幼稚園では、保護者が園を訪れる機会がたくさんあります。活動に参加するうちに保護者は積極的に園の活動を楽しむようになるそうです。

参加するうちに保護者の意識が変わる

横浜市保土ヶ谷区にあるスカイハイツ幼稚園は、「子どもにとっても保護者にとっても楽しい幼稚園」をモットーとしています。これは、「幼児期の教育は家庭教育と密に連動しているため、子どもの教育だけではなく、保護者の教育に携わるのも、幼稚園の大切な役割である」という渡邊眞一園長先生の理念に基づいています。

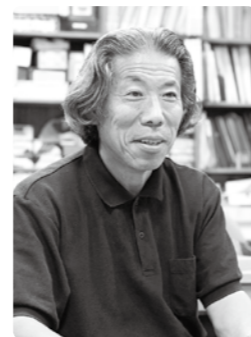
「保育者や子どもと一緒に、保護者も学び合いながら育ってほしいのです。そのため、保護者が園の活動に参加する機会をできるだけ多くもつとともに、集まりの前やあとで、保護者に向けて最近の園のことを話すなど、コミュニケーションも欠かさないようにしています」と園長先生は説明します。

園では、保護者会や保育参観、運

動会のほか、1年に1回、保護者が子どものクラスの先生のアシスタントをする機会も設けています。また、お父さん同士が交流し、園児との遊びの企画を立てる「スカイ papa の会」、卒園生のOBの交流会である「おやじの会」もあります。園では、お父さんたちが気軽に訪れる姿を日常的に見ることができます。

6年前からは、園長先生による「子育て講座」も開講。さらに、今年1月からは、「子育て講座」を受講した保護者を園が「お母さん保育士」に認定し、園での子育て支援に協力してもらうという試みをスタートさせました。

「最近では、人付き合いがあまり得意ではない保護者が増えてきた気がします。最初は、園での活動に積極的ではない保護者も多くいました。でも、あまり難しく考えなくてもいいと思います。多くの保護者は、園での教育活動に参加するうちに、だ



園長 渡邊眞一先生

んだん変わってきます。単純に、『参加してみると案外楽しかった』『子どもの様子も見られて、参加して得をした』と思ってもらえるようです。保護者が変われば子どもも変わります。『親育』は、結果的に子育て支援につながると、改めて実感しています」（園長先生）

今回は、園長先生による「子育て講座」と、お母さん保育士による「すくすく広場」の様子についてご紹介します。

母親を対象とした園長先生の「子育て講座」

実践 1

「子育て講座」では、育児や幼児教育について楽しく学べ、毎回参加者が多く集まります。出席すると、保育者のアシスタントを務める保育実習の機会が得られることも人気です。

子育てや幼児教育の理論をわかりやすく解説

今年で6年目になる「子育て講座」。卒園児と在園児の母親を対象に全10回からなり、5回以上出席すると保育士のアシスタントを1日務める保育実習の機会が得られます。また、3分の2以上出席すると、お母さん保育士として園から認定されます。

講座の内容は、渡邊園長先生の著書『新しい保育原理』（樹村房）を基にその内容をかみ砕いてわかりやすく解説します。この日は「幼稚園教育のねらいと目標」がテーマ。「体の丈夫な子どもになってほしい」「根気強く、何でもやり抜く生活力のある子どもになってほしい」など、園の教育目標が幼稚園教育要領とどのようにかわるかを伝えていきます。

園長先生は、卒園児との思い出や先日行われた運動会でのエピソード



ユーモアを交えながらわかりやすく解説する園長先生の話は、保護者に好評を博している。



講座に気軽に参加できるように、小さな子どもを連れてくることも可能。



園の理念や教育方針を伝えることにより、園と保護者が共通認識をもって、子どもと向き合うことができる。

などをユーモアを交えて話し、教室はその度に笑い声で包まれました。

「まずは、学ぶことが楽しいと思ってもらうことが大事。また、時には、今の国の教育政策についても解説するなど、保護者の視野を広げられるような情報も提供しています。保護者の中には、6年間連続で受講しているかたもいます。子育てや幼児教

育についての知識をもったかたが増えるということは、園にとっても地域にとっても心強いこと。受講するうちに、もっと園の活動にかかわりたいと思ってくれる保護者も増えてきました。そのような保護者の活躍の場をもっと増やせればと考えています」（園長先生）

受講者の声

杉山勝美さん（9歳児）

○子育て講座に参加して、今年で6年目です。私の息子はもう幼児期は過ぎましたが、講座を聞くことで今までの子育てを振り返ることができる、よい機会となっています。また、講座を終えて保育実習ができるのもいいですね。在園児と、まるで自分の子どもようにふれあえるのが楽しみで、気づけば、毎年受講しています。



田中友子さん（9歳児・6歳児）

○講座では、ちょっとした子育てのポイントも教えてくれるので、それを聞くことで子育てに余裕が生まれたと思います。また、子育てに関連する政策についても話してくれるので、今までは自分のこととしてピンとこなかったニュースが気になるようになり、自分の視野が広がりました。



兵頭美枝さん（9歳児・7歳児・6歳児）

○この講座は、小さい子どもを連れてきてもよく、敷居が低いところがいいと思います。ふだん、聞きたくてもここに聞いたらいいかわからない生の子育て情報を、先生の経験からわかりやすく教えてくれます。また、講座に参加することで、友だちが増えるのも魅力ですね。



※（ ）内は子どもの年齢

実践 2 お母さん保育士による「すくすく広場」

実践 2

未就園児の親子が遊びに訪れる「すくすく広場」。ここで活躍しているのが園から認定されたお母さん保育士です。未就園児の親と園を結ぶ架け橋の役割も担っています。

お母さん保育士も参加者もともに学び合い成長できる場

「すくすく広場」とは、未就園の子どもと母親を対象としたもの。園の一室を開放し、火・水・木の午前中にお母さん保育士が主体となって、親子のふれあいの機会をサポートしています。

この前身となる取り組みは以前からありましたが、本格的にスタートしたのは横浜市子ども青少年局補助事業となった2009年の1月から。「子育て講座」を修了した26名のお母さん保育士が、「すくすく広場」に常時4人いられるようシフトを組んでいます。

「すくすく広場」の目的は、親子で遊ぶ場としてはもちろん、どうしても孤独になりがちな未就園児の母親が元気になる場として機能すること。子育てを経験してきたお母さん保育士に気軽に相談することで、「子育てってこれでいいんだ」と肩の力が抜けて気が楽になる母親も多

いと言います。一方、お母さん保育士にとっては、自分の子育てを振り返ることができる良い機会に。「お母さん保育士になって、保護者として成長させてもらえた」と実感する保護者も少なくないようです。

「すくすく広場」は、あくまでも親子が楽しむ場所で、お母さん保育士は親子を見守りながら必要なときだけサポートするというのが基本的



この日は、「おおきなかぶ」の人形劇を行った。お母さん保育士は、抑揚をつけてしょうずに物語を進める。



「無理のない範囲でできることをする」のがお母さん保育士のモットー。井戸端会議のように気軽に子育てについて相談できる。

な考え方です。しかし、お母さん保育士から「もっと広場を盛り上げるためのしかけをしたい」という声が上がると、基本的な考え方を守りながらも、時々、人形劇や季節のイベントなども行うようになりました。この日は、人形劇や絵本の読み聞かせが行われ、子どもたちは興味津々で聞き入っていました。

参加者の声

市川宏美さん(3歳児)

◎実は、来年からこちらの園でお世話になると思っています。娘は最初、幼稚園に行くのをいやがっていたのですが、「すくすく広場」で、お母さん保育士に優しく遊んでもらい、最近は、幼稚園のイメージがよい方向に変わってきたようです。子どもにとっては、園の先生もお母さん保育士も同じ先生。「すくすく広場」で園の雰囲気に慣れることができてよかったです。私自身も、お母さん保育士から園の様子を教えられて、とても参考になりました。娘が入園したら、私もお母さん保育士になりたいと思っています。



お母さん保育士の声

三枝紀代美さん(5歳児)

◎お母さん保育士の活動を始めてから、園でのわが子の姿を見る機会が増え「今日はお外で遊んでいたね」など、家に帰ってから親子の会話が増えましたね。お母さん保育士として「すくすく広場」で活動し始めた当初は、どこまで訪れてくれた親子にかかわればいいのかわからず、戸惑ったこともありましたが、「子育て講座」で、園の考え方も学んだので、それに沿ってできることをしています。最近では、お母さん保育士の意識がとても高まってきたように思います。親子ともども幼稚園に育ててもらっていると実感しています。



※()内は子どもの年齢

子どもだけでなく親もサポートするのが園の役割

まとめ

園で大切にしているのは、「子どもだけ」「親だけ」ではなく、「親子」一緒に育っていくという観点です。親子関係を密にするための総合的なサポートをしています。

保護者の自主的な活動を園が後押し

保護者が園の教育活動に参加できる機会を多くもつスカイハイツ幼稚園。「活動が軌道にのるまでは保育者がかかわりますが、それ以降は、保護者が主体性をもって運営してくれます。このような機会を多くもつうちに、保護者が自主的に活動を行うという風土ができあがってきました」と渡邊園長先生は振り返ります。

「すくすく広場」を担当する後藤智子先生も、「お母さん保育士は本当に熱心。子どもにこんな教育を受けさせたいという思いをもっていると同時に、では、親はどうすべきかということをしっかり考えてくれています」と太鼓判を押します。

「すくすく広場」で活動しているお母さん保育士は、現在26人で、そのうちリーダーは5人。ふだんは、リーダーがほかのお母さん保育士の意見のとりまとめを行っています。しかし、ときには、園が舵取りを行うこともあります。

「例えば、以前、小さい子どもがいるために少ししか活動に参加できないお母さん保育士がいて、不平等だという意見が出ました。しかし、お母さん保育士は、小さな力を合わせて大きな力にしていきたいと思います。『私の力でよければ』という気持ちを大切にしたいという園の方針はしっかり示しました。園としての考えをき

ちんと伝えると、保護者も納得してくれます。このように、園としての方向性を間違わないようにマネジメントすることが大切だと思っています」(後藤先生)

なにか課題がもち上がったときは、話し合いの場をもち、解決していく。これにより、園と保護者との間の共通認識もさらに深まっています。現在、スタッフミーティングは学期に1回程度ですが、熱心な方が多いので、ミーティングの回数を増やしていきたいと考えているそうです。

現在の「すくすく広場」は、設立時のメンバーが継続的に活躍しており、欠員が出た際のみ、お母さん保育士に認定されているかたの中から募集するというかたちになっています。今後は、より多くのお母さん保育士が活躍できる場をつくりたいと考えているそうです。

後藤先生は、「子育ては本当に大変。親にとっては『こんな大変な日々がずっと続くのかな。だったら、園に任せてしまいたい』とってしまうこともあると思います。でも、幼



「すくすく広場」担当 後藤智子先生

児期は、親にとっても子どもにとってもかけがえのない大切な時期。できるだけ一緒にいて、関係を深めてほしいのです。だからこそ、園では、保護者に活動に多く参加してもらい、親子の関係がもっと密になるサポートをしたいと考えています」と強調します。

「園に来て保育者と子どもの様子を見ながら『こんなふうでいいんだ』とずっと保護者に感じてもらいたいですね。そして、自分の子どもだけではなく、園児や地域の子どもたちを、みんなで大切に育てていく……そんな気持ちを共有できるように、一緒ががんばっていきたく思います」(後藤先生)

スカイハイツ幼稚園



◎「生活体験と多様な遊び」を基本に、総合的な教育計画を立案、実行している。子育て支援にも力を入れており、預かり保育や4年保育も実施。学校法人初音丘学園では、幼稚園機能と保育所機能を兼ね備えた総合乳幼児教育施設も運営。

園長 渡邊眞一先生

所在地 〒240-0003 神奈川県横浜市保土ヶ谷区天王町2-50-1

園児数 150名(満3歳～5歳児)

事例紹介 3

自由参加型のサークルで 保護者同士のつながりを再生

津田このみ保育園 (兵庫県・私立)

役員を選出して少人数で話し合う従来の保護者会を改め、自由参加の保護者サークルを発足させた津田このみ保育園。そこには、保護者同士の自然なつながりをつくることで、子育てにかかわる心理的な負担を軽減させるねらいがありました。

保護者が自由に子育てを語り合う「やまももの会」

「やまももの会」では、子育てに関する悩みを参加者が自由に話し合います。そこでは、保育者は保護者同士の交流を促進するサポート役です。保護者の自主性を尊重し、はぐくむ取り組みをご紹介します。

実践

地域住民も参加する コミュニティーを形成

津田このみ保育園が従来の保護者会を改め、自由参加の保護者サークル「やまももの会」を立ち上げたのは2009年4月。保護者会の役員を引き受けることの負担感が大きいことに加え、なかなか時間を合わせにくい保護者同士のつながりをつくり、子育て支援につなげるのがねら

いでした。井上裕子園長先生は次のように話します。

「周囲に相談する人がおらず、育児に悩む保護者がたくさんいます。やまももの会が、子育てに関する情報を交換して悩みを吐き出せる場になればと考えました」

園が地域住民に向けて開放するスペース「わんぱくルーム」で開催されるサークルには、毎回15~20名ほどが参加。早めに日時を決めるこ

とで、都合がつきやすいように工夫しています。椅子をサークル状に並べ、途中の出入りは自由。小さなお子さんを抱っこして参加されるお母さんも少なくありません。園からは、園長先生と子育て支援担当の三輪由香里先生が参加します。

サークルでは、参加者が子育てについて考えていることや悩みを自由に話し合います。例えば、ある保護者が「子どもが悪いことをするとた



「やまももの会」には、保育者と保護者のほか、卒園した子どもの保護者など地域の住民も参加している。



園長
井上裕子先生



子育て支援担当
三輪由香里先生

たいてしまうが、それが正しいのか自信がない」という悩みを打ち明けると、園長先生は同じ年ごろの子どものいる保護者に「〇〇さんは、どう思いますか」などと話をつなげていきました。また、別の保護者が子どもに愛情を伝えようと懸命になる体験を話したときは、園長先生が「子どもと向き合うって、どういうことだろう？」と、みんなで一緒に考える視点を提示。参加者から体験を交えたさまざまな意見が出されると、園長先生はそれらを踏まえて自身の考えを述べ、話し合いをまとめます。

どを設定していましたが、しだいに保護者同士のネットワークができ、今では自主的に集まることもあるそうです。園の負担が小さくなったこともあり、今年度は1~2カ月に1回ほどの実施を今後は月1、2回に増やして、もっと多くの保護者に参加してもらおう考えだと言います。また5月に開催した料理教室が好評だったため、今後も希望者を集めてイベントを開く方針です。

「保護者に感想をうかがうと、『話を聞いてもらえて気持ちが楽になった』『自分のやり方で間違っていないという自信がついた』など、前向きな声がほとんどです。保護者同士のつながりの良さを自覚するところからスタートして、ゆくゆくは地域社会で活躍できるような人材が育つと良いと思います」(園長先生)

従来の保護者会がなくなることに

より、園行事に協力する保護者が減るのではという心配もありましたが、それは杞憂でした。行事に自主的に協力する保護者は、サークルの参加者を中心に以前よりも増えたそうです。保護者会が主催していたバザーは、今年実施しない予定でしたが、やまももの会の保護者が自主的に企画して開催されました。

口コミによってサークルは徐々に拡大しています。それに伴い、今までの保護者会では見られなかった保護者同士の交流が生まれ、園と保育者との関係も大きく変わりつつあります。

自主的に活動を 始める気持ちが生まれる

やまももの会は、在園する子どもだけでなく、卒園した子どもの保護者や祖父母をはじめ、地域住民の参加も歓迎しています。三輪先生がそのねらいを説明します。

「子育ての先輩の話は、とても心に響くものです。とくに、小学校の事情は園の保護者をもっとも知りたいことのひとつ。実際に地域の小学校にお子さんを通わせたかたの話には、みなさんが関心をもっています」はじめは園側がサークルの日時な

保護者の声

津田珠美さん (5歳児)

◎他の保護者と話していると、「悩みは一緒なんだな」と安心し、解決の糸口が見えることがあります。卒園されたお子さんのいる保護者から経験談を交えた適切なアドバイスをいただけるのも非常に心強いですね。会への参加を通して保育園や園長先生とのつながりが深まったとも感じています。



池田広女さん (3歳児)

◎今回初めて参加しましたが、とても明るく自由な雰囲気でしたので、自分の思いをしっかりと話すことができました。1歳のころとは異なり、2歳児以降はひとりの先生が見る子どもの数が増え、先生とのかかわりが薄くなっていくようで不安がありました。このように情報交換のできる会があると本当に安心です。



藤本恭子さん (卒園者の祖母)

◎2人の孫がお世話になりました。せっかくなつながりが切れてしまうのを残念に思っていたところ、やまももの会の発足を知って参加させていただきました。みなさんと話すだけで楽しいですし、私の話が少しでもお役に立てばおうれしいです。今後行事などに協力して園に恩返しをしていく考えです。



津田このみ保育園



◎地域の小・中学校や自治会、民生委員、そして家庭との連携を図り、子育て支援事業に力を注ぐ。3~5歳児は縦割りのクラス編成で、いたわりや助け合う気持ちを育てる。「自然教室」をはじめ自然体験も充実。

園長 井上裕子先生

所在地 〒672-8079 兵庫県姫路市飾磨区今在家6丁目133番

園児数 181名 (0~5歳児)

※ ()内は子どもの年齢

事例紹介 4

子どもの様子の伝え方を工夫して、保護者と保育者が思いを共有

板橋区立大谷口保育園（東京都・公立）

多忙な保育の中で一人ひとりの保護者と十分なやりとりを行うことはなかなか容易ではありません。子どもの年齢や保護者のニーズに合わせた、効率的で保護者の共感を呼ぶ情報提供の例をご紹介します。

園での子どもの様子をクラスごとに工夫して伝える

板橋区立大谷口保育園では、今年4月からクラスごとに保護者とのつながりを深める取り組みを始めました。園だよりや壁新聞を工夫するなど、クラスごとに取り組みを進めた結果、保護者との関係が変化しつつあります。

実践

クラスだよりや壁新聞、連絡帳で子どもの様子を伝える

板橋区立大谷口保育園の花野綾子園長先生は、「対等な目線を意識しながら、子どもを媒介にして保護者とつながっていききたい」と言います。このような方針のもと、2009年4月に保護者とのつながりを深める取り組みをスタート。0～5歳児の各担任がそれぞれのクラスの実態を踏まえ、クラスだよりや壁新聞、連

絡帳などを通して、保護者に園での子どもの様子を伝える方法を模索しています。

園共通ではなく、クラスごとに取

り組みを変えているのは、子どもの年齢や時期に合わせて保護者と思いを共有するため。例えば、2歳児はおしゃべりがだんだんとさかんに

掲示物の工夫



模造紙に掲示した写真に保護者や保育者が「吹き出し」を付けられるようにしてコミュニケーションを図る。



毎日の活動内容（歌・絵本・遊びなど）を掲示。手書きにするなどして負担を減らすのがポイント。

保護者の声

安田直美さん（4歳児・5歳児）

○今年から園の雰囲気がとても変わったと思います。丁寧に情報を伝えてくれるため、毎日の遊びの内容など、園での生活の様子がよく分かり、こちらも相談をしやすくなりました。クラスだよりは、父親や祖母にも見せており、子育てについて話し合う良い機会となっています。



黛恵里香さん（1歳児・4歳児）

○親子ともども、クラスだよりを楽しみにしています。ひらがなで書かれているので、子どもも一生懸命に読んで、自分について書かれていると大喜びします。子どもの様子だけでなく、保護者の声も載せられているのは、ほかのお母さんがたがどのような考えで子育てをしているのかが分かって参考になりますね。

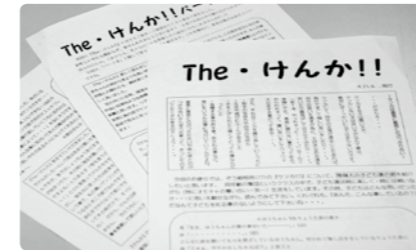


大南めぐみさん（2歳児）

○「つぶやき」が掲載されたクラスだよりは子どもが言葉を発したときの情景が浮かびやすく、読んでいて安心します。ほかの子どもに関心をもつきっかけにもなりました。子どもたちをしっかりと見てくださっているのを感じ、先生との距離も近づいたと思います。



クラスだよりの工夫



子どものケンカの様子を実況風におもしろく掲載。発達に必要なケンカに対する理解を促す。

る時期。そこで、保育中に聞かれた子どもの「つぶやき」を記録したクラスだよりの発行を始めました。すると、家庭でのつぶやきや行動を報告するかたが増えるなど、保護者により一層、子どもの成長に注意深くなる変化が見られたと言います。

3歳児のクラスだよりも特徴的です。友だちとの関係づくりを通して成長するこの時期は、子ども同士の衝突がしばしば起こります。しかし、ある程度のトラブルは発達上不可欠と保育者が考える一方で、必要以上に過敏になる保護者が多いというギャップがありました。そこで担任が発行したクラスだよりが、その名も「The・けんか」。実際のけんかや仲直りの場面を軽快な実況風に描写するとともに、けんかを通して学べることなど保育者の思いを伝えると、保護者の多くが理解を示し、連絡帳で長文の感想が寄せられました。

保育者と保護者が高め合う関係へと変化していく

保護者支援の観点から、保護者同

連絡帳の工夫



保護者から質問があったとき、了承を得たうえで、連絡帳でほかの保護者に伝えてアドバイスを募る。

士のつながりをつくることに力を入れるクラスもあります。1歳児のクラスには、ひとりめの子どもをもち、仕事と子育ての両立に悩む保護者が多く見られました。担任は、「昨夜、なかなか子どもが寝てくれませんでした。よい方法はありますか」など、保護者から質問を受けた際、他の保護者の連絡帳にメモ用紙を挟み、質問へのアドバイスを募集。翌日、アドバイスを教室の前のホワイトボードに掲示します。質問に回答する保護者は、毎回、8割以上と言います。

多くのクラスでは、情報の伝わりやすさを重視し、壁新聞などに効果的に写真を使っています。例えば、壁に写真を掲示して、保護者や保育者がコメントを自由にはれるようにしたり、写真で4コマストーリーをつくって掲示したり、保護者の関心



園長 花野綾子先生

を引くひと工夫が見られます。

「子どもの様子について保護者への伝え方を工夫するようになってから、『クラスだよりや掲示された写真を携帯電話で撮影し、父親や祖父母に見せるようになった』という声がかかるなど、子どもを媒介にしたつながりが着実に広がっている実感があります」

さらに花野先生が感じているのが保育者の変化。取り組みのアイデアは、各担任の先生が試行錯誤して生み出します。苦労もありますが、それだけに保護者の反応がよいときの喜びは大きく、園内の活気が増しているそうです。情報提供の手法や質を見直す取り組みは、保育者と保護者が互いに高め合う相乗効果を生み出しているようです。

板橋区立大谷口保育園



○1・2階が保育園、3階が地域集会所の複合施設。開かれた園づくりに力を入れ、地域の小・中学生や高校生、高齢者の訪問が多く、世代間交流が盛ん。

園長 花野綾子先生

所在地 〒173-0031 東京都板橋区大谷口北町87番1号

園児数 122名（0～5歳児）

※（ ）内は子どもの年齢

意識のギャップを克服する情報提供と関係づくり

インタビュー

板橋区立大谷口保育園の取り組みを指導する、白梅学園大学子ども学部准教授の増田修治先生に、同園の「保護者支援」と、「保護者と協力して子育てをするための保護者支援」のポイントをうかがいました。



増田修治先生

ますだ・しゅうじ
白梅学園大学子ども学部准教授。専門は、臨床教育学、教師教育論、教育実践論など。小学校教員を経て現職。著書に「子どもが育つ言葉かけ」(ひとなる書房)、『笑って伸ばす子どもの力』(主婦の友社)など。

信頼につながります。

保育者にとっても、「保護者から信頼されている、支持されている」という思いが自信になり、「さらにならぼう」という気持ちが生まれます。園では、取り組みを始めてからわずか半年間で、園内の雰囲気が目に見えて明るくなりました。その背後には、保育者と保護者がどちらも前向きな気持ちになり、互いの信頼関係が深まったことがあると思われます。

保護者の横のつながりを強化し「孤(こ)育て」から「共(とも)育て」へ

私は、今の日本の子育てが、「孤(こ)育て」になっていることを心配しています。「孤」は「孤独」から取ったものです。多くの保護者がひとりぼっちで子育てをしているという思いを持っているのではないのでしょうか。以前、小学校教員をしていたころに、保護者から「どう育てればよいのか分からない」といった悩みを打ち明けられたことがよくありました。「ほめてあげてください」と言っても、「どうほめるのですか」と返されて驚いたこともあります。保育者が考える以上に、基本的な子育てについて分かっていない保護者が多いという認識は必要かもしれません。

そのような保護者には、保育者がアドバイスするのも有効ですが、保

護者同士の横のつながりをつくれたら、さらに良いでしょう。互いに情報を交換し、「みんな同じことを悩んでいるんだな」と気持ちを共有できれば、子育てはずっと楽になります。そのように「孤育て」から「共(とも)育て」へと変えていく視点が保育者に求められています。

保護者を「認める」ことから関係づくりは始まる

保護者とのつながりは、あくまでも子どもを通してつくっていくものです。子どもは一人ひとりが心の中に「風呂敷」をもっているとイメージしてください。その中に「あの遊びが楽しかった」「明日はこれをしたい」といった多くの思いを包んで家にもって帰り、保護者の前でその風呂敷をひもといて、ひとつずつ取り出して話します。子どもが楽しそうに話す様子を見た保護者は、きっと保育者を信頼して、園の活動にも協力したいという気持ちが生まれる

でしょう。

中には自分の子どものことだけを考え、無理な要求をする保護者もいるかもしれません。はっきり言ってしまうと、親は誰しもわがままです。逆に、「わが子主義」ではない保護者などいるのでしょうか。でも、それで良いのだと思います。「『わが子主義』で大いに結構」と、認めてあげることから保護者の成長はスタートするのではないのでしょうか。次の段階として、「他の子どもとのかかわりに目を向けると、さらに成長しますよ」というメッセージを送れば、保護者の視野はだんだんと広がります。同時に保護者同士の横のつながりも生まれていくでしょう。こうした順序を踏まず、最初から「ほかの子どものもも考えてください」と言っても、なかなか聞き入れられないのも無理はないでしょう。

子どもが起こしたトラブルについて保護者に話す際にも、まずは認める態度を明確にしてください。いきなり核心から入らず、「〇〇ちゃん、こんなことができたんですよ」など

と、その子の良さをたくさん話すようにしましょう。そして保護者が十分に心を開いてから、「実は、こういうことが……」と切り出します。ポイントは、「こういうふうにしようと思いますが、お母さんはどう思われますか」などと、最終的な判断を保護者にゆだねることです。保育者の考えを押しつけず、あくまでも提案のかたちにするので、協力して保育する関係をつくっていくのです。

特にトラブルをよく起こす子どもの保護者には気をつけて接する必要があります。これまでに子どものことで何度も注意され、「次は何を言われるのか」と身構えているかたが多くいらっしゃいます。まずは、保護者自身が忘れかけている、その子の良さに気づかせてあげましょう。子どもは、保育者や保護者から認められると、驚くほど変わるものです。そのような保育者と保護者の協力関係が、今の保育に求められているのではないのでしょうか。

成長の道筋を見えやすくし保護者を安心させる

保護者との間に信頼関係を築くには、まず保護者がどのような情報を欲しているのかを意識する必要があります。保護者は「わが子は成長しているか」「どのように他の子どもとかかわっているか」などをもっとも知りたがりですが、保育者はその日の活動内容といった事実を話して情報提供をしたつもりになっている

ことがよくあります。このギャップがある限り、保護者から十分な信頼を得るのは難しく思えます。

その点、今回の園の取り組みでは、日々の活動内容とともに、その背景にある保育者の思いや、子ども同士がかかわり合う姿を写真や言葉で分かりやすく伝え、成長の道筋を見えやすくしています。子育てに悩む保護者にとって、わが子の成長を知ること何よりの励みであり、「着実に育っている」という実感は園への

増田先生から現場の皆さんへのメッセージ

近年は、保育に求められることが増え、ますます多忙になっていますから、保護者支援についてゆっくりと考える時間がないという園もあるでしょう。しかし私は、保護者支援の強化は、幼保小連携をはじめ、さまざまなことに好影響をもたらすと考えています。

いわゆる「小1プロブレム」を引き起こす子どもは、保護者の育て方に問題が見られる傾向があります。子

どもに無関心だったり、乱暴な言葉を浴びせたりすることから、子どもの気持ちが不安定になっているのです。こうした問題に対しては、園の活動を通して子ども同士のつながりを大切にして、コミュニケーション能力を育てることです。そして、そこに保護者を巻き込んで親子がともに成長できるしくみをつくっていくことが大切だと思います。

父親の子どもとのかかわりと子育て観

ベネッセ次世代育成研究所では、0歳から6歳までの子どもをもつ父親を対象に、2005年、2009年と父親の子どもとのかかわり様子や子育て観などのアンケート調査を実施しました。乳幼児をもつ父親は家事や育児にどのようにかかわっているのでしょうか。また、どのような願いや不安をもち、子育てにのぞんでいるのでしょうか。保護者理解の一助として、前回実施した2005年の調査結果との比較も行いながら、父親についてご紹介していきます。

今回ご紹介するデータの調査概要

調査名 第2回 乳幼児の父親についての調査
調査テーマ 父親と子どもの関係、家族関係、父親の仕事と家庭のバランスなど
調査方法 インターネット調査
調査時期 第2回2009年8月/第1回2005年8月
調査対象 首都圏(東京、神奈川、千葉、埼玉)に住む0歳~6歳4カ月(就学前)の父親。サンプル数は右の通り
 ※2009年は、比較群として地方部でも調査を実施した(529サンプル)が、2009年の全体数値には含めていない。

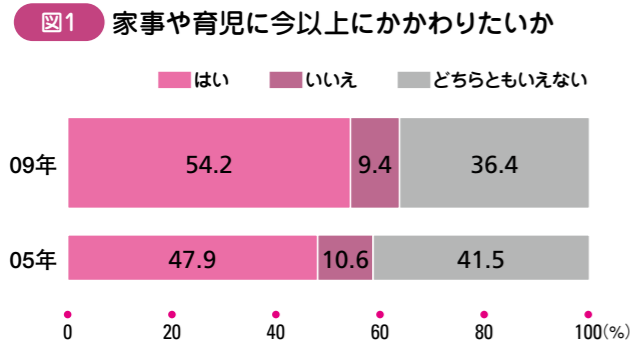
【4年経年比較のサンプル数】 (人)

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	合計
09年	721	721	721	721	721	721	248	4574
05年	429	468	468	471	489	481	150	2956

※速報版は次世代育成研究所ホームページから無料でご覧いただけます。
<http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/>

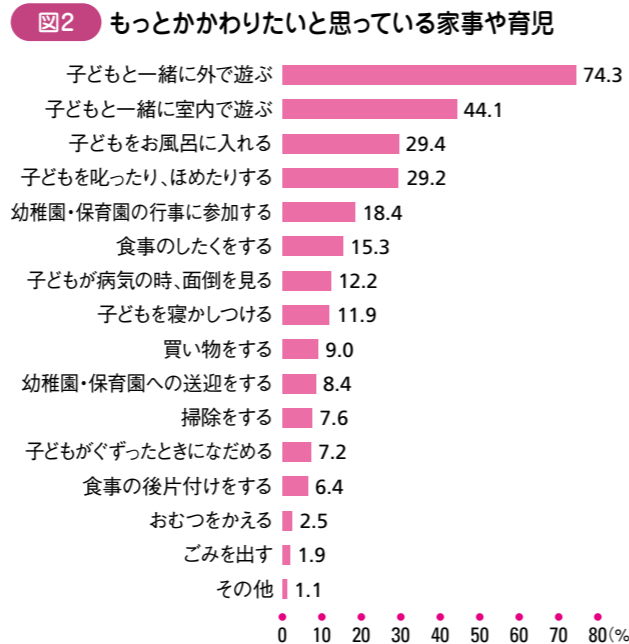
「今以上に家事や育児にかかわりたい」父親が増加

Q あなたは、家事や育児に、今以上にかかわりたいと思いますか



★05年に比べて、今以上に家事や育児にかかわりたいと思う父親の割合が6.3ポイント増加しています。もっとかかわりたいと思っている内訳を見てみると(図2)、上位から順に「子どもと一緒に外で遊ぶ」(74.3%)「子どもと一緒に室内で遊ぶ」(44.1%)「子どもをお風呂に入れる」(29.4%)「子どもを叱ったり、ほめたりする」(29.2%)「幼稚園・保育園の行事に参加する」(18.4%)でした。

Q もっとかかわりたいと思っているものを3つまで選んでください。

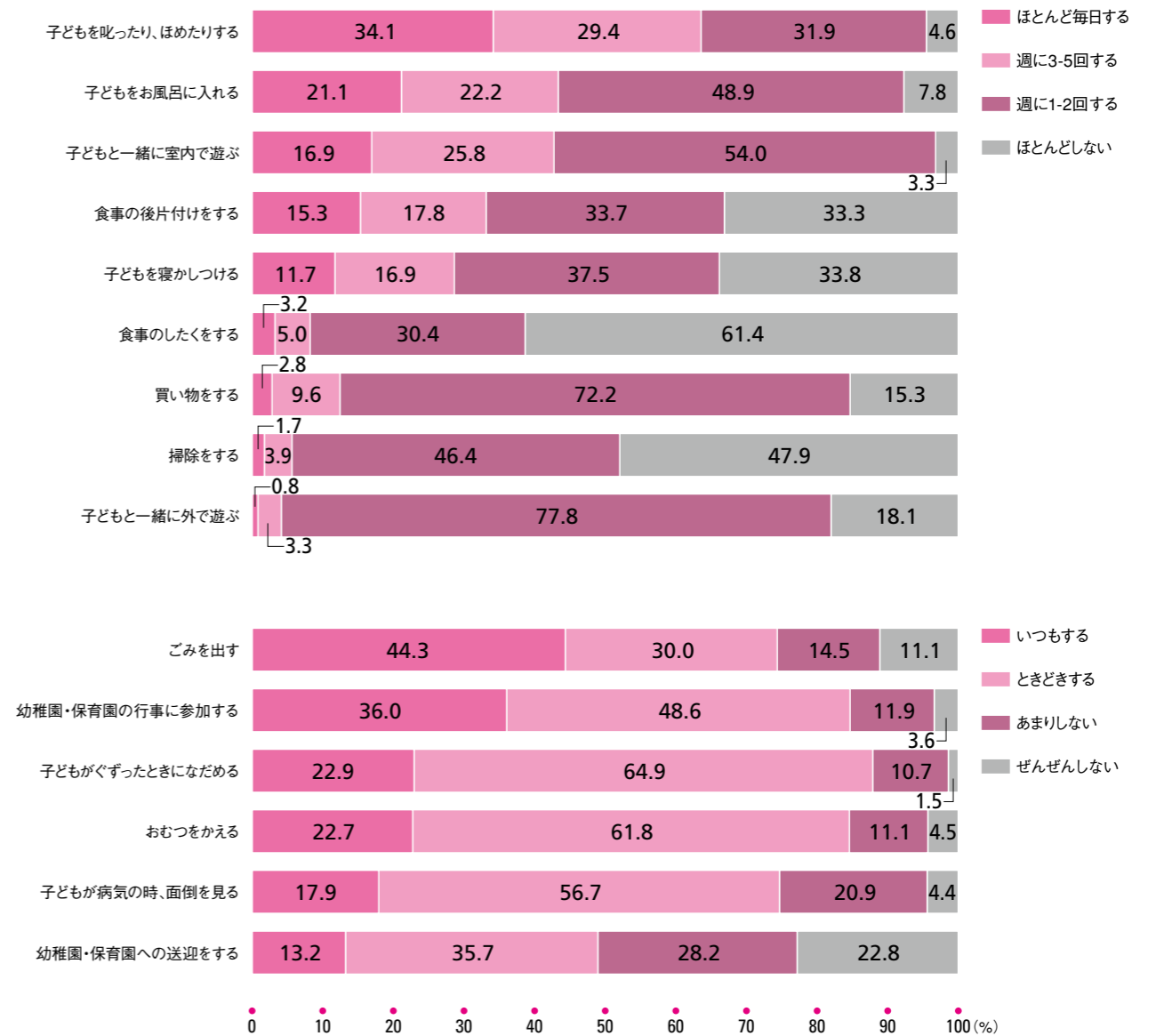


注1 図1の質問で「はい」と回答した人のみに質問。上位3つを選択
 注2 2009年の結果

父親がよくするのは「子どもを叱る、ほめる」「ごみ出し」「園行事への参加」

Q あなたは、次のようなことについて、どれくらいしていますか

図3 父親が家事・育児をする頻度



注1 「ほとんど毎日する」「いつもする」の数値が高いものから順に図示している
 注2 「該当しない」を除いた数値を表示
 注3 2009年の結果

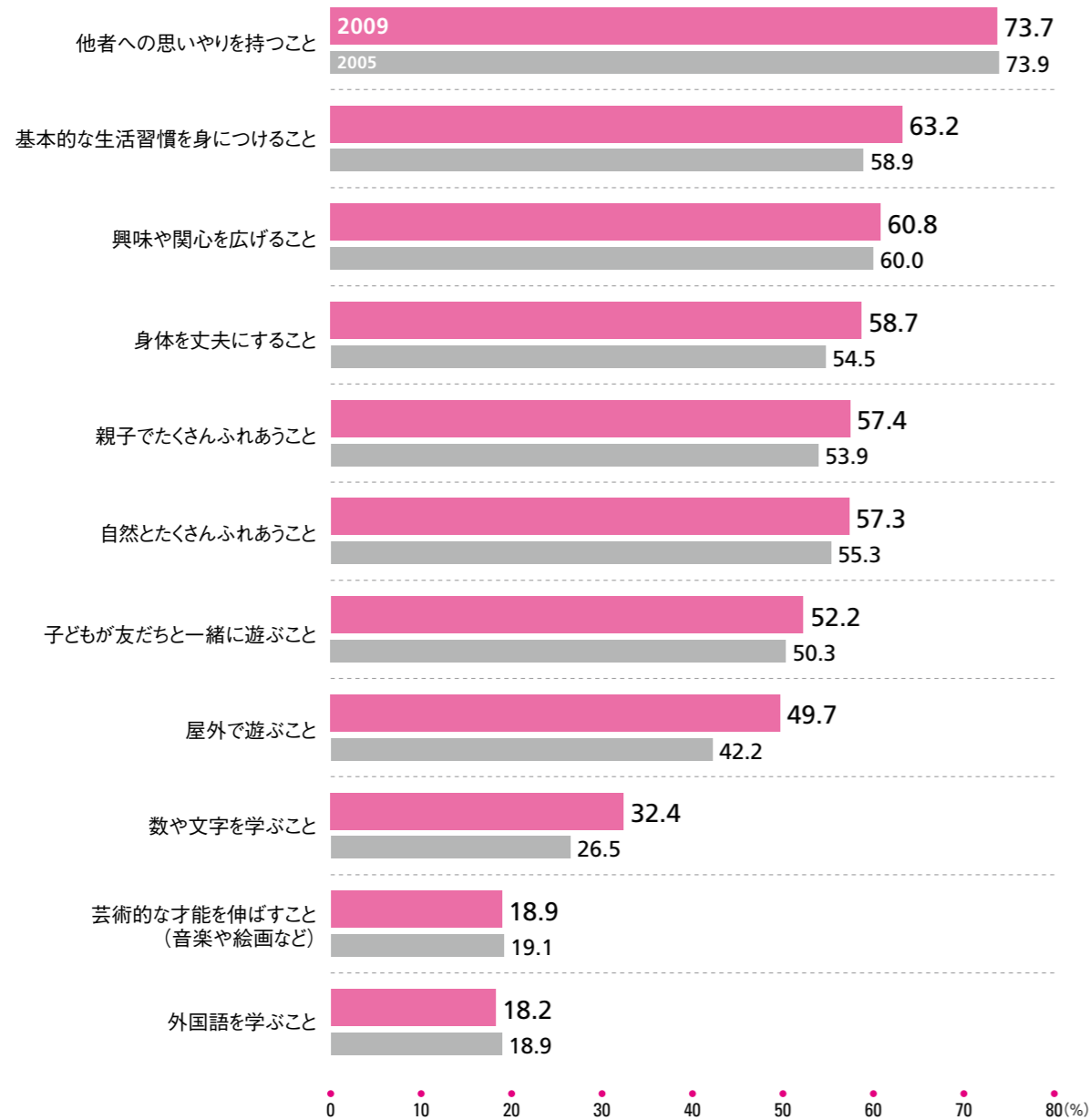
★現在かかわっている家事・育児に関する15項目についての頻度を聞いたところ、「ほとんど毎日している」の回答では、「子どもを叱ったり、ほめたりする」「子どもをお風呂に入れる」が多く、「いつもする」のは「ごみを出す」「幼稚園・保育園の行事に参加する」であることがわかりました。

「子どもと一緒に外で遊ぶ」については、「週に1~2回する」が約8割と頻度が高くはありません。しかし、この項目は、もっとかかわりを増やしたい項目として1位になっており(図2)、子どもと一緒に外で遊びたいけれど、実際にはあまり遊べていないと思っている父親の現状がうかがえます。

力を入れたいのは「他者への思いやり」「基本的な生活習慣」「興味や関心を広げる」

Q あなたは、どのようなことに力を入れて、お子さんを育てたいと思いますか。

図4 子育てで力を入れたいこと



注1 2009年の調査において「とても力を入れたいと思う」の数値が高いものから順に図示している

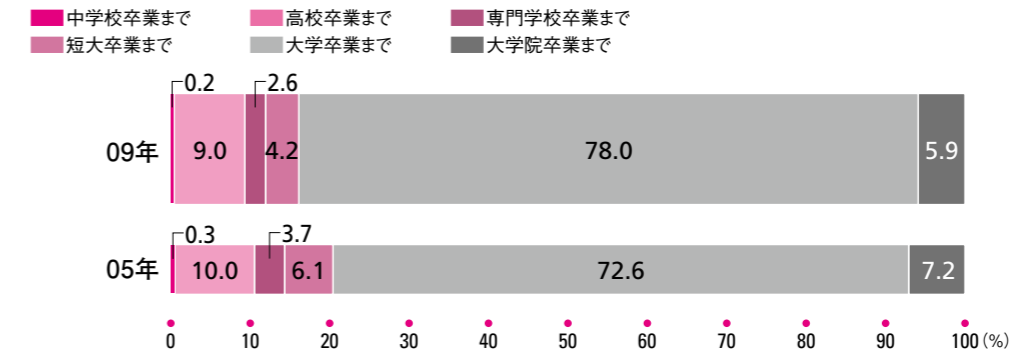
★子育てで力を入れたいと思うことについて、上位3項目は05年と変わらず「他者への思いやり」「基本的な生活習慣」「興味や関心を広げる」でした。全体的には「芸術的な才能を伸ばす」「外国語を学ぶ」をのぞくすべての項目で「とても力を入れたいと思う」数値が増加する

傾向があり、父親が子育てに熱心になっていることがうかがえます。05年と比較して増加が大きいのは「屋外で遊ぶ」(7.5ポイント増)「数や文字を学ぶ」(5.9ポイント増)でした。

子どもの進学は「大学卒業まで」が増加

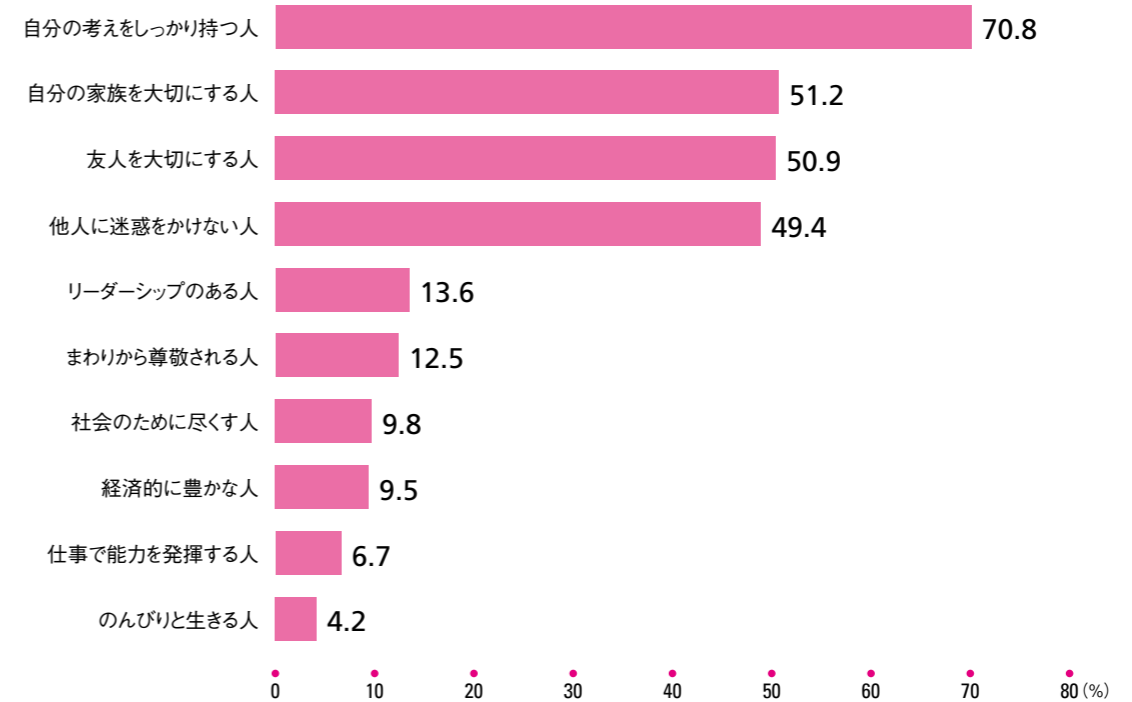
Q 現在、お子さんをどの程度まで進学させたいとお考えですか。

図5 子どもをどこまで進学させたいか



Q お子さんに、将来どのような人になってほしいと思いますか。

図6 子どもの将来像



注1 10項目中3つまでを選択 注2 2009年の結果

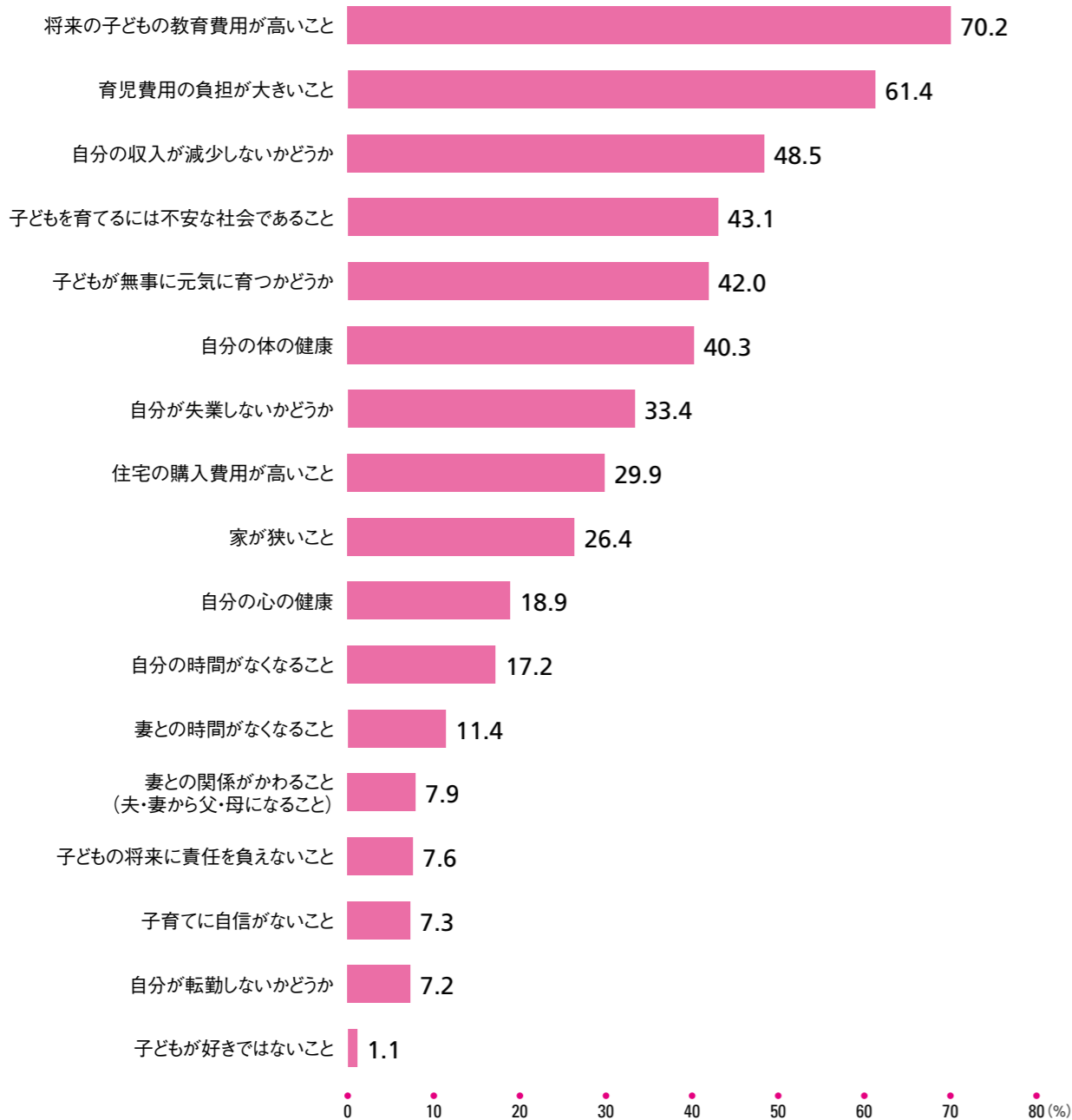
★子どもの進学は「大学卒業まで」を希望する父親が増加(5.4ポイント)しています。また、どのような大人になってほしいかを尋ねると、「自分の考えをしっかりと持つ人」が70.8%と最も高く、「自分の家族を大切

にする人」「友人を大切にする人」「他人に迷惑をかけない人」が続いています。父親はこのような価値観や資質が、これからの社会を生きるうえで必要と感じているようです。

不安なことは、「将来の教育費」「育児費用」「自分の収入の減少」

Q 父親として、今後不安なことはありますか。

図7 父親として不安なこと



注1 複数回答／2009年の結果

注2 提示した19項目中、「その他」「特になし」をのぞく17項目を掲載

★父親として、今後不安なことの上位3つは「教育費」「育児費用」「自分の収入の減少」でした。昨今の景気や雇用情勢の影響も考えられますが、子育て中の家計を支え

る父親にとって、費用面での不安が大きいことが分かる結果となりました。

ベネッセ次世代育成研究所からの発刊物のご案内

これからの幼児教育を考える

無料



2009 秋

特集 保育者の資質を高める 園内研修とは

◎保育者が自らの保育を振り返り、気づきを得られるような「園内研修」とは？秋田喜代美先生のインタビュー、大豆生田啓友先生のQ&A、園内研修の具体的な手法を事例とともに紹介しています。

A4判 24ページ



2009 春

特集 幼小連携の充実に向けて 現場が取り組むべきこと

◎改訂幼稚園教育要領でも強調された「幼小連携」について、調査より明らかになった現状や実践例を紹介しています。座談会では小学校が幼稚園に期待することを取り上げました。

A4判 24ページ



2009 夏

インタビュー 幼保一体化と 新しい幼児教育

◎今後の動きが注目される幼保一体化について、その課題や展望を汐見稔幸先生と無藤隆先生の巻頭対談でとりあげます。また、幼保公私さまざまな立場のかたからの寄稿から新しい幼児教育を考えています。

A4判 24ページ



2008 秋

特集 幼稚園教育要領改訂を 日々の保育にどう生かす？

◎幼稚園教育要領の改訂を受け、現場ではどのようなことに留意して保育を展開していくとよいでしょうか。「規範意識」「協同して遊ぶ」という改訂のキーワードを具現化した実践紹介も掲載しています。

A4判 24ページ

幼児教育・保育に関する発刊物



第1回 幼児教育・保育についての 基本調査報告書 (幼稚園編・保育所編)

◎全国の幼稚園・保育所を対象に共通の設計に基づき、幼児教育・保育の実情と課題を明らかにした調査の報告書。

B5判 160ページ

有料

頒価1500円

※ホームページから購入申し込みできます。



幼児の遊びにみられる 学びの芽

◎4、5歳児の遊びの事例を59サンプル収集し、遊びに含まれる学びの可能性や保育者のかかわりを分析しました。

A4判 72ページ

無料



保育所での 子どもの発達と 保育のポイント

◎0歳から就学前までの子どもの成長発達と保育者のかかわりや、幼児の言動の意味と援助のポイントをまとめました。

A4判 112ページ

無料

上記の刊行物はすべてホームページからご覧いただけます。

各種検索エンジンで「ベネッセ次世代育成研究所」と検索してください。

ベネッセ次世代育成研究所

検索

<http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/>

編集後記

園は楽しい場所と思ってもらふこと、気持ちを受け止めて、自らの気づきを促すこと—保護者の成長支援は、子どもへの働きかけにとってもよく似ていました。園はあまり気構えることなく、子どもと保護者の成長を同時に応援することが大切と言えるでしょう。保護者が自分の子どもだけでなく、園の子どもの保護者として成長したとき、園にとって最強のサポーターになっていくようです。(杉田)

「これからの幼児教育を考える」2010春号

2010年1月20日発行

発行人 新井 健一

編集協力 (有)ペンダコ/二宮良太

後藤 素子 (株)協同プレス

印刷・製本 (株)ベネッセコーポレーション

企画・製作 ベネッセ次世代育成研究所

発行所 (株)ベネッセコーポレーション

〒101-8685 東京都千代田区神田神保町1-105

神保町三井ビルディング

次号予告


これからの 2010 Summer 夏 幼児教育を考える

次号は2010年5月下旬発行(予定)
年3回の発行(予定)です

表紙／裏表紙

山口県 ● 山口大学教育学部附属幼稚園

お問い合わせ先

 **0120-933-964**

受付時間 10:00～17:00(日曜・祝日は除く)

※通話料無料

※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。

※携帯電話・PHSからもご利用できます。

※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は、**086-214-6337**へおかけください(ただし通話料がかかります)。